

# 聖徳太子の新羅侵攻譚

——輪王寺天海蔵「聖徳太子伝」に見る護國的太子像——

松 本 真 輔

## 一 はじめに

中世太子伝は、「聖徳太子伝暦」を中核として、多様な広がりを見た。<sup>1)</sup>その流れは、「伝暦」の注釈書と、「伝暦」を再編し、物語化された太子伝テキストに大別される。<sup>2)</sup>これらは、基本的に太子の偉業喧伝を目的として編まれ、そこには、およそ史実とはかけ離れた様々な脚色が施されている。

ところが、偉業に彩られているはずの太子伝に、一つの「傷」が存在する。それが、任那政策に関連した、新羅侵攻譚だ。『日本書紀』(以下「書紀」)や『聖徳太子伝暦』(以下「伝暦」)では、太子存命中の崇峻天皇と推古天皇の代に、新羅侵攻に関する記事が載せられている。特に、推古天皇の代には、太子が摂政として侵攻を指示し、具体的な軍事行動が起こされたとされている。ところが、この侵攻は、その目的を果たせず終了してしまう。太子の新羅政策が失敗したのだ。そのため、中世太子伝では、この「傷」を覆い隠すための、様々な改変が加えられる。

その代表的な例として、ここでは、輪王寺天海蔵「聖徳太子伝」(二四四五年写。以下、輪王寺本)を取り上げてみたい。同書は、「聖法輪蔵」(法雲寺本・満性寺本系)<sup>3)</sup>と近似した、ないしは同一の本文を持つ物語的な太子伝で、一般に「文保本」と仮称されるテキスト群の最古本である。<sup>5)</sup>『聖法輪蔵』に関しては、従来、絵解きとの関連が注意され、内容的な問題については、「中世における王権とそれを支えるものの始源を説く、あらたな歴史叙述」<sup>7)</sup>との評価を受ける一方で、完本が存在せず、残された伝本を全てつないでも、欠落した年次があるという問題を持っている。そこで、本稿では、全体の見通しを得るため、「首尾完備した現在知られている最古の古写本」<sup>8)</sup>である輪王寺本を軸に、その叙述の特性について論じてみたい。結論的に言うならば、輪王寺本の新羅侵攻譚は、敗戦を勝利に書き換え、太子の護國的側面を強調するという特徴を持っている。以下、その変容の過程と、思想的背景について、考察を加えてみたい。

## 二 新羅侵攻譚の展開

輪王寺本の問題に入る前に、『書紀』から『伝暦』、そして『伝暦』の注釈に至るまでの、新羅侵攻譚の展開を確認しておこう。

『書紀』では、欽明天皇二年四月、百濟聖明王から、「今天皇詔称、速可建任那」と、新羅の攻撃を受けた任那の回復が要請され、その後、同十五年に聖明王が戦死し、同二十三年「春正月、新羅打滅任那宮家」と、任那滅亡が伝えられる。そして、同三十二年に「汝須打新羅、封建任那」と遺言して、欽明天皇が永眠する。続いて、敏達天皇の代にも任那復興が図られるが、いずれも計画倒れに終わり、それが現実の行動に移されたのが、崇峻天皇の代である。以下、その部分を、『書紀』と『伝暦』を対照させながら見ておこう。

（崇峻四年）秋八月庚戌朔、天皇詔群臣曰、朕思欲建任那。卿等何如。群臣奏言、可建任那宮家、皆同陛下所詔。冬十一月己卯朔壬午、差紀男麻呂宿弥・巨勢猿臣・大伴連噲・葛城烏奈良臣、為大將軍。率氏氏臣連、為裨將部隊、領二万余軍、出居筑紫。遣吉士金於新羅。遣吉士木蓮子於任那、問任那事。

（書紀）

詔群臣曰、朕思欲建任那。卿等如何。群臣奏曰、皆同詔旨。太子独奏曰、新羅豺狼。貪婪難量。外称相隨。内実相叛。今雖興軍。不得濟成。況亦宮庭近有血臭乎。冬十一月。差紀臣男麻呂。巨勢臣猿。大伴連噲。葛木臣小楠等。為將軍。率氏氏臣連等。為裨將部隊。領二万六千人。

出居筑紫。太子謂左右曰、此軍不遂。雖行而止。徒費人力。莫若停止。天皇聞而惡之。

（伝暦）

両者に共通するのは、軍事行動の発案者が崇峻天皇であること、軍勢を筑紫に送ったところで記事が終わり、派兵の結末が記されていないことだ。また、派兵の目的が、任那復興になっている点にも注意しておきたい。

一方、『伝暦』では、『書紀』には姿を現さなかった聖徳太子が登場し、新羅侵攻の中止を提言して、天皇と対立する（傍線部）。

ただ、両者とも、ここでは、新羅に兵を送ったとはされていない。本格的な軍事行動が記録されているのは、推古八年二月条（太子二十九歳）である。まず、『書紀』では、「天皇欲救任那」と、天皇の発案によって任那救済の軍が半島に送り込まれる。そして「攻五城而拔。於是、新羅王、惶之。率白旗、到于將軍之麾下而立」と、侵攻は一旦成功を収めるが、軍を撤収した後、「即新羅亦侵任那」と、再び半島で戦乱が勃発。二年後の推古十年二月には、太子の実弟、来目皇子を大將として軍事行動がはじまるが、皇子は筑紫で病に倒れ、翌推古十一年二月に、「薨於筑紫」という結果になる。それでも作戦は続けられ、同年七月には、当摩皇子を派遣するが、同行した妻が明石で没したため軍を引き返し、最終的に「遂不征討」という結末で、新羅侵攻の幕はおりる。

『伝暦』では、当摩皇子が登場しないが、大筋は『書紀』と同様だ。ただ、『書紀』では表に出てこなかった太子が、『伝暦』では、侵攻の旗振り役にされている。

太子奏曰。新羅者虎狼之国也。不承我命、猶犯任那。不致滅亡。彼猶不輟。臣乞命將加討令服。天皇然之。

(太子二十九歲)

太子奏曰。令高麗百濟急救任那。

(太子三十歲)

太子奏曰。興數万征軍遣伐新羅。天皇然之。

(太子三十一歲)

太子謂侍從曰。新羅奴等遂殺將軍。即勅還軍。

(太子三十二歲)

傍線部を見ればわかるように、『伝暦』では、侵攻の立案から撤退の指示まで、太子が積極的に関与したとされている。

また、筑紫に派遣された来目皇子の記述にも注意したい。『書紀』では、その死因について語ることがないが、『伝暦』では、太子三十歳四月条で「来目皇子到筑紫。臥病不進。太子聞之。語左右曰。新羅奴等。厭魅將軍」とされている。「厭魅」とは、盗賊律第十七条で処罰の対象とされている「図形・人形などを用いて人を害するまじないの法」のこと。『伝暦』は、新羅の呪詛によって大陸侵攻が妨げられたとしているのである。そして、結局、任那復興という当初の目的は、果たせずに終わる。以上が、『書紀』および『伝暦』の新羅侵攻譚のあらすじである。

### 三 四天王寺と新羅

『伝暦』の記述で注意したいのは、新羅に対するネガティブで敵対的な視線である。例えば、「太子独奏曰。新羅豺狼。貪婪難量。外称相隨。内実相叛。」(太子二十歳)「太子奏曰。新羅者虎

狼之国也」(太子二十九歳)など、太子の口から、新羅に対する貪欲で狡猾なイメージが語られている。そして、こうした敵意むき出しの表現は、後代の太子伝注釈にも受け継がれていく。

『天王寺秘決(太子伝古今目録抄)』では、「任那新羅事」として「太子奏曰。新羅任那貪狼之国也」と述べ、橘寺法空の『聖德太子平氏伝雜勘文』でも、『書紀』皇極天皇元年五月条に見える「百濟新羅風俗。有死亡者。雖父母兄弟夫婦妹。永不自看。以此而觀。無慈之甚。豈別禽獸」を引いて、太子の言葉の説明する。同じく法空の「上宮太子伝拾遺記」も、「百濟。高麗。任那。新羅貪狼之情恒以強盛」と、『伝暦』の記述を踏襲している。また、法隆寺僧重懷の「太子伝見聞記」には、太子二十歳条に「新羅人ノ意豺狼也」とあり、依然として、法隆寺にも、新羅に対するネガティブなイメージを継承する注釈が存在していたことが確認できる。

一方、四天王寺では、新羅のみならず、半島の国々が、調伏の対象とされていた。『四天王寺御手印縁起』では、これらの国々に対する敵対意識が表現され、四天王に国家守護の期待がかけられている。

百濟・高麗・任那・新羅、貪狼之情、恒以強盛。摂伏彼等州、為令帰伏、造世四天王像、向置西方、後代代世王位、固令守護。

また、これを典拠に記された親鸞の『皇太子聖德奉讃』には、次のような記述がある。

仏子勝鬘のたまはく／百濟・高麗・任那・新羅／有情のあり

さまこと／＼／貪狼のこゝろさかりなり／かれらのくにを  
摂伏し／帰伏せしめむためにとて／護世四天をつくりてぞ／  
西方にむかへて安置せる<sup>21</sup>

仏子勝鬘<sup>22</sup>聖德太子は、半島の国々を調伏するために、四天王  
像を安置した——これが親鸞の理解である。四天王寺の太子信仰  
では、半島国家の調伏と国家鎮護が、密接な関連をもつて説かれ  
ていたことがわかる。そして、この「摂伏」の様子が詳細に記さ  
れるのが、「四天王寺行田坊」の「秘伝」という奥書を持つ、輪  
王寺本「聖德太子伝」なのである。

#### 四 輪王寺本の新羅侵攻譚

中世太子伝の新羅侵攻譚については、覚什「聖德太子伝記」に、  
日本と新羅・百濟・高句麗との敵対関係、任那存続の認識が見ら  
れ、その原型は「伝暦」よりも、中世に増補された太子伝にある  
ことが指摘されている。ただし、覚什「聖德太子伝記」と輪王寺  
本の新羅侵攻譚は、内容そのものかなりの差異があり、覚什太  
子伝の方がより「伝暦」に近い。

では、輪王寺本は、どういう特徴をもっているのか。ここでは、  
次の三点を確認しておきたい。

- ① ストーリーが変化し、最終的に侵攻が成功したとされてい  
る点。
- ② 新羅侵攻の理由が、半島の脅威から日本を守るためだとさ  
れている点。
- ③ 新羅や百済が、「大國」であると強調されている点。

まず、①のストーリーの変化について見ておこう。

輪王寺本太子二十歳条では、崇峻天皇が二万六千の軍で派兵を  
行おうとする。しかし、これに対して太子が「今六七箇年之間、  
大國無<sup>23</sup>左右、不可<sup>24</sup>傾者也」と、侵攻の失敗を予見し、両者の  
対立が表面化する。そして、太子は、崇峻天皇に「凡<sup>25</sup>君臣諫  
以<sup>26</sup>有<sup>27</sup>御用、為<sup>28</sup>賢王、此帝自<sup>29</sup>元御性忿惡々、忠臣諫更無<sup>30</sup>御用、御  
事也」と痛烈な批判を浴びせ、「御寿程奉<sup>31</sup>相、実短命<sup>32</sup>御治世僅  
五ヶ年見給<sup>33</sup>、明年必御命尽<sup>34</sup>給<sup>35</sup>。」と、天皇の余命が長くないこと  
を理由に、侵攻の失敗を予言する。

「伝暦」でも、太子が侵攻の中止を提言したのに対して「天皇  
聞而惡<sup>36</sup>之」と、両者の対立が描かれている。一方、輪王寺本で  
は、これを更に発展させ、崇峻天皇が「太子御諫終無<sup>37</sup>御用、  
二万六千騎大勢差<sup>38</sup>下西國、新羅百済令<sup>39</sup>發向<sup>40</sup>給<sup>41</sup>。」と、太子の忠  
告を無視して、軍事行動を開始する様が描かれている。ところが、  
侵攻は、新羅と百済が日本の將軍を調伏したため、「吾朝大將軍  
乍<sup>42</sup>二人、俄受<sup>43</sup>病留<sup>44</sup>、全不<sup>45</sup>遂<sup>46</sup>御本意<sup>47</sup>ケル也」という結末を迎  
えてしまう。太子の予言が的中したのである。

この場面、「伝暦」には「出<sup>48</sup>居筑紫」とあるだけで、結末は  
記されていない。しかし、輪王寺本では、実際に船が発し、新  
羅の呪咀で返り討ちにあつて侵攻が失敗したとされている。呪咀  
で將軍が死去するというのは、「書紀」や「伝暦」に描かれた推  
古天皇代における侵攻譚の結末だが、輪王寺本では、それがこの  
部分に転用され、侵攻の失敗が描かれているのである。そして、  
侵攻を中止せよという太子の諫めを無視した崇峻天皇が、「実愚

御ケル」と、非難されている。<sup>(24)</sup>

ところが、続く二度目の侵攻譚では、一転して勝利の物語が描かれる。まず、太子の発案で、軍が半島に送り込まれる。

以<sup>レ</sup>阿倍<sup>ノ</sup>大臣<sup>ヲ</sup>、為<sup>シ</sup>大將軍<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>穗積<sup>ノ</sup>大臣<sup>ヲ</sup>、為<sup>シ</sup>副將軍<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>三十一万余騎<sup>ヲ</sup>、大勢<sup>ヲ</sup>、新羅<sup>ノ</sup>・百濟<sup>ノ</sup>・國々<sup>ヲ</sup>、責<sup>メ</sup>伏<sup>セ</sup>給ケル也。太子<sup>ハ</sup>、亦御兄久米<sup>ノ</sup>皇子<sup>ヲ</sup>、為<sup>シ</sup>大將軍<sup>ニ</sup>、二万五千余騎<sup>ヲ</sup>、大勢<sup>ヲ</sup>、重責<sup>メ</sup>大國<sup>ニ</sup>給<sup>フ</sup>。

(太子二十九歳)

そして、『書紀』や『伝暦』と同様、半島に渡った日本軍が活躍し「新羅國ノ大王大恐惶<sup>シ</sup>、捧<sup>テ</sup>白旗<sup>ヲ</sup>、打<sup>テ</sup>向<sup>テ</sup>日本<sup>ニ</sup>、大將軍<sup>ニ</sup>奉<sup>シ</sup>乞<sup>フ</sup>降<sup>ヲ</sup>」と日本の勝利が描かれ、戦利品として「種々重宝」や「曆本、及天文地理之遁甲、方術等、陰陽、書籍等」が、日本に送られてくる。太子二十九歳の侵攻が成功するという筋書きは、『書紀』や『伝暦』と同様だが、先に触れたように、『書紀』や『伝暦』では、この後、新羅が再び任那に攻め込み、次いで派遣された来目皇子が呪咀で死去するという結末(『伝暦』太子三十二歳。『書紀』は次いで当摩皇子の派兵挫折まで描く)になっている。

ところが、輪王寺本では、この来目皇子が太子二十九歳条に登場し、「隨<sup>テ</sup>大國<sup>ヲ</sup>、無<sup>ニ</sup>為<sup>ル</sup>有<sup>ル</sup>御婦<sup>ヲ</sup>、於<sup>テ</sup>鎮西<sup>ニ</sup>崩御成給<sup>フ</sup>」と、侵攻に加わって大陸に渡り、凱旋して筑紫で死去したとされている。そして、この侵攻を神功皇后の伝説と重ね合わせながら、太子を賛嘆するところで、話が終わっている。

このように、輪王寺本の新羅侵攻譚は、侵攻の成功の場面を描くのみで、その後の新羅の反攻や、侵攻の挫折については一切無視し、勝利の物語に仕立てあげられているのである。<sup>(25)</sup>

## 五 半島の脅威と「大國」

次に、②の、日本が新羅侵攻を企てた理由について述べてみたい。『書紀』や『伝暦』で、新羅侵攻の理由が任那復興とされていたことについては、第二節で確認したとおりである。いわば、日本の権益確保が侵攻の理由とされていた。しかし、輪王寺本では、出兵の理由が大きく異なっている。すなわち、新羅と百済が日本侵攻を計画しているため、それを防ぐために逆に侵攻に踏み切ったとされているのである。

太子が派兵に反対した第一次侵攻では、こうした点は明確にされていないが、太子が積極的に推進した第二次侵攻においては、日本侵攻を企てる新羅と百済の脅威が、はっきりと描かれている。

まず、第二次侵攻の前年、太子二十八歳のときに、半島の脅威を予感させる事件がおきる。新羅や百済から、「様々異形鳥類馬羊等」が送られてくるが、その中に「白雉」が含まれていた。この鳥は、「飛千里鳥類」ではあるけれど、千里に満たない日本には不要であるという理由で、日本がこれを送り返してしまう。これを見た新羅と百済が、日本は小国であることを確認し、軍事行動を起こしたという情報が伝えられる。それを聞いた太子は、「多軍兵相催、可<sup>キ</sup>責<sup>メ</sup>大國<sup>ヲ</sup>之由、忽思食立給<sup>フ</sup>」と、新羅侵攻を心に決めるのである。半島から動物が送られてきたという記事は『伝暦』にも見られるが、輪王寺本は、これをふくらませて、新羅と百済が侵攻を企てるという、日本の国家的危機を設定しているのである。

こうした危機をうけて、太子二十九歳条では、太子が推古天皇に「新羅百済等国々起、日本可責之由、聞侍」と、新羅と百済の脅威を進言し、侵攻を実行に移している。<sup>(27)</sup>つまり、国家の安全保障を理由に太子が侵攻に踏み切った、というのが、輪王寺本の説明なのである。<sup>(28)</sup>

そして、これに関連して注意しておきたいのが、③にあげた、日本にとつての脅威とされる新羅や百済が、「大国」とされている点である。

第二、三節で触れたように、「伝暦」やその注釈においては、新羅に対して、「豺狼」(「伝暦」太子二十歳)、「虎狼」(同太子二十九歳)といった表現が用いられていた。一方、輪王寺本では、侵攻対象が新羅だけではなく百済も含まれているが、これらに対して「虎狼」に類する表現は用いられていない。

では、輪王寺本では、これらの国々はどこ描かれているのか。それを端的に示すのが、「大国」という表現である。たとえば、「新羅百済等随・大国」(太子二十歳)、「夏之比、責・[大]国・給処是也、震旦・百済・任那・高麗等国々也」「新羅、高麗、震旦、百済等・[大]国」(以上、太子二十九歳)等の記述が、随所に現れる。つまり、新羅や百済は、単に日本の脅威とされているだけではなく、強大な敵対者として描かれているのである。

一方、「[大]国」と描かれる新羅や百済と対照的なのが、「[小]国」とされる日本である。新羅侵攻譚には、「[小]国」という表現は見られないが、輪王寺本全体を見渡すと、「[小]国・辺土」(太子五歳)「我朝・[小]国也」(太子二十七歳)「日本・云・[小]国・生給」(太子三十六

歳)のように、日本を「[小]国」とする記述が、繰り返し現れる。そして、太子二十六歳の記事では、震旦・百済の王宮を「莊嚴美麗、人間界住所不覺」と誉める一方、これと日本の王宮を比較して、次のように述べている。

而今我朝王宮・[大]国・帝闕・分・百分一、不及二分、輕賤以諸木、為材木、以土瓦、覺其・内外莊嚴、以外疎也。実小国片土・悲。

むろんこれは、「[小]国片土」の日本を強調するためのレトリックではあるが、輪王寺本が、百済と日本の国力差を対照的に描き、殊更に日本を矮小化していることがわかる。また、太子二十七歳条では、お手馬である黒駒を得たときの太子の言葉を、次のように伝えている。

日本人中、彼馬御舍人・相應者、更不待。尔時、太子、日本・少国・故、此馬舍人、不可有相應仁、[大]国者可相尋。

「[少]国」日本には、黒駒のような優駿を御せる者がいないので、「[大]国」出身の者を捜せと命じ、「[大]国」である百済の調子丸が指名されるのである。このように、輪王寺本では、「[小]国」の日本が繰り返し強調され、半島の「[大]国」との落差が、巧妙に仕掛けられているのである。<sup>(31)</sup>

以上、①②③を踏まえると、次のように結論づけられる。輪王寺本の「新羅侵攻譚」は、日本に対する「[大]国」の脅威が繰り返し述べられ、それ故、国を守るために軍が送られ、戦争に勝利した結果、「[小]国」日本が守られるという構造になっている。輪王寺本の「新羅侵攻譚」は、単にストーリーが敗戦から勝利に書き換えられているだ

けではなく、護国説話という側面を強く持っているのである。

## 六 護国の太子像

輪王寺本新羅侵攻譚の護国的側面を考えると、注意しなければならないことがある。それは、新羅侵攻が単に太子の発案で行われたというだけではなく、太子が勝利に積極的に寄与したとされている点である。太子二十九歳条、新羅王降伏の場面を見てみよう。

太子又於<sup>テ</sup>四天王寺金堂<sup>ニ</sup>、令<sup>メ</sup>講<sup>セ</sup>安宅經<sup>ヲ</sup>給ケレハ、四天王無量眷屬<sup>ヲ</sup>引率<sup>シテ</sup>、日本大勢<sup>ニ</sup>相加、權者実者大勢<sup>ニ</sup>、各振<sup>テ</sup>威神<sup>ヲ</sup>、打<sup>ニ</sup>随<sup>ヒ</sup>方<sup>ヲ</sup>、貢<sup>ニ</sup>大國<sup>ニ</sup>給ケレハ、新羅國大王大恐惶<sup>ニ</sup>、捧<sup>テ</sup>白旗<sup>ヲ</sup>、打<sup>ニ</sup>向<sup>ヒ</sup>日本大將軍<sup>ニ</sup>奉<sup>リ</sup>乞<sup>フ</sup>降<sup>ヲ</sup>、震旦・百濟・任那・新羅・高麗等國々皆悉奉<sup>リ</sup>隨<sup>ヒ</sup>ケル也。

太子が四天王寺の金堂にこもり『安宅經』を読誦したところ、四天王が眷屬を率いて戦いに参加し、新羅王を降伏させ、震旦や百濟、高句麗、任那をも追従させた、というのである。『書紀』や『伝暦』でも、新羅王を一旦降伏させる場面が描かれるが、実際の戦闘に太子が関与したとはされていない。『伝暦』においても、太子は単に侵攻の命令を下す役割を果たしているだけにすぎない。しかし、輪王寺本の太子は、単に侵攻の指示を出すだけでなく、誦経を通して、勝利に決定的な影響を与えたとされている。太子は、外敵の脅威から日本を救った、護国の英雄として描かれているのである。

また、太子が誦経した場所が四天王寺である点も重要である。

太子が『安宅經』を読んだという記事は、『伝暦』太子三十二歳条にあり、本来、新羅侵攻とは関連づけられていない。また、『講安宅経於宮庭』と、經典を講じたのは宮中だとされているところが、輪王寺本は、この部分を新羅侵攻譚に組み入れ、場所を四天王寺に移しているのである。

第三節でも触れたように、四天王寺には「新羅という外敵調伏の祈願<sup>32</sup>」という役割が期待されており、『四天王寺御手印縁起』や親鸞の和讃で、それが具体的に語られていた。外敵の調伏という四天王寺に対する信仰は、中世にも受け継がれ、文永元（二六四）年に、龜山院が四天王寺の金堂で蒙古調伏の仁王大会を開いたとされるなど、元寇の際には、四天王寺に上皇や貴族の参拝が相次いでいた。むしろそこには、「永以為鎮護國家之枢<sup>35</sup>」<sup>36</sup>とうたわれた、四天王寺に対する護国信仰があった。

輪王寺本をはじめとする文保本や『聖法輪藏』の成立に関しては、四天王寺、乃至はその周辺の関与が推測されているが、輪王寺本太子二十九歳条が、外敵調伏と鎮護國家という四天王寺の信仰に支えられている点にも、注意しておく必要があるだろう。

そして、太子の護国的性格を強調するなら、日本に脅威を与える外敵は、強大であれば強大であるほど効果的であるのは、言うまでもない。輪王寺本が、新羅や百濟を「大國」と執拗に強調するのも、「大國」の脅威から「小國」日本を守った太子の偉業が強調されるという図式になるからであらう。

しかも、こうした護国的太子の造型は、新羅侵攻譚のみに見られるものではない。

輪王寺本では、太子に大きく関わる三度の合戦が描かれる。ひとつは、太子十歳時の、蝦夷との戦い。次は、太子十六歳の守屋合戦。もう一つが、今回検証したこの新羅侵攻である。物語的な中世太子伝には、合戦場面が肥大化するという大きな特徴があるが、これらの戦いの場面では、王権が危機に瀕する様が描かれ、その都度、太子の活躍によって、日本が守られるという構図と展開になっているのである。

たとえば、「二天乱、朝家御大事」（輪王寺本太子十歳）と言われた蝦夷との合戦では、「書紀」や「伝暦」などの記述を逸脱して、太子が単独で敵陣に乗り込み、太子の活躍で蝦夷を制圧したと叙述する。また、「仏法王法大怨敵」（同太子十六歳）と言われた守屋との合戦は、大苦戦を強いられながらも、再び太子の活躍で勝利するという展開を示している。これらは全て、日本の安全保障を揺るがす大事件と位置づけられ、こうした危機が太子の活躍を通して回避され、「一天王位安穩令持、下四海民心安」（同太子十歳）というように、国の安全が確保されるという展開になっている。つまり、太子は、護国の英雄として描かれ、そうした目的の下に、本来は敗戦の物語だった新羅侵攻譚が、勝利の物語に書き換えられているのである。

しかし、ここに見る太子には、日本仏教の始祖といった性格づけをされ、「以和為貴」という言葉から連想されるような、平和的なイメージはない。また、新羅侵攻譚においては、守屋合戦での「朕自元殺生全不本意」（輪王寺本太子十六歳）といった逡巡さえも見られない。日本の「安穩」のためなら、隣国に侵攻し、

武力制圧することも厭わないというわけだ。護国とは、敵の調伏と表裏一体なのである。そこには、武の性格を強く帯びた太子の姿があると言えるだろう。

注(1) 阿部隆一「室町以前成立聖德太子伝記類書誌」（聖德太子研究会編『聖德太子論集』平楽寺書店、一九七一年二月）

(2) 阿部泰郎「聖德太子伝——中世太子伝『正法輪藏』の輪郭——」（『国文学解釈と鑑賞』五一—一九号、一九八六年九月）

(3) 『真宗史料集成』第四巻に翻刻がある。

(4) 同前掲注(1)

(5) 阿部泰郎「中世聖德太子伝『正法輪藏』の構造——秘事口伝をめぐりて——」（林雅彦・渡辺昭五・徳田和夫編『絵解き——資料と研究』三弥井書店、一九八九年七月）では、輪王寺本の系統を甲類、醍醐寺本「聖德太子伝」（二四六〇年写）を最古本とする系統を乙類に分けている。

(6) 宮崎圓達「中世における聖德太子伝の絵解——正法輪藏を中心として——」（『聖德太子研究』三号、一九六七年九月）、小倉豊文「聖德太子と聖德太子の信仰」（綜芸社、一九七二年七月）、今堀太逸「中世太子信仰と神祇——醍醐寺藏『聖德太子伝記』を中心に——」（『鷹陵史学』八号、一九八二年二月）、阿部泰郎「『正法輪藏』東大寺図書館蔵本——聖德太子絵解き台本についての一考察」（『芸能史研究』八二号、一九八三年七月、同『正法輪藏』）

(7) 同前掲注(2)

(8) 『国文学解釈と鑑賞』五四—一〇号、一九八九年一〇月、一九六頁 渡辺信和氏の解説。



(9) 後述するように、太子伝における新羅侵攻は、百済や高句麗も含む場合があるが、本稿では一括して新羅侵攻譚と呼ぶ。

(10) 太子の新羅侵攻に関する歴史的展開については、三品彰英「聖徳太子の任那政策」(同前掲注(一))に詳しい。

(11) 日本古典文学大系「日本書紀(下)」六九頁。以下、「日本書紀」の引用は同書による。また、漢字は通用のものに改めた。

(12) 以下、「伝暦」の引用は、日中文化交流研究会編「東大寺図書館蔵文明十六年書写『聖徳太子伝暦』影印と研究」(校楓社、一九八五年二月)による。

(13) 以下、太子の年齢は「伝暦」に従う。

(14) 日本思想大系「律令」九六頁の頭注による。

(15) 「大日本仏教全書(一一二)」七〇頁

(16) 同前掲注(15)、一八〇頁

(17) 同前掲注(15)、三一六頁

(18) 内閣文庫蔵本による。

(19) 太子伝における百済の問題については、柳原小葉子「古代における對外意識と聖徳太子信仰——百済観を中心として」(『歴史評論』五八六号、一九九九年二月)、同「古代中世の對外意識と聖徳太子——法隆寺僧顕眞の言説の期するもの——」(『日本歴史』六一七号、一九九九年一〇月)、金相鉉「百済威徳王의 父王을 위한 追福斗夢殿観音」(『韓国古代史研究』一五号、一九九九年五月)が参考になる。また、聖徳太子の従者調子丸と百済の関係については、林幹彌「太子信仰の研究」(吉川弘文館、一九八〇年二月)、湯浅吉美「舍人調子丸の末裔による太子伝 聖徳太子伝私記・顕眞徳業口決抄」(『国文学解釈と鑑賞』五四—一〇号、一九八九年一〇月)、藤井由起子「中世法隆寺と聖徳太子関連伝承の再生——法隆寺僧顕眞と調子丸、法華山寺僧慶政と太子御影——」(佐伯有清編「日本古代中世の政治と文化」吉川弘文館、一九九七年二月)等、かねてより注目を集めていた。

(20) 「圖書寮叢刊 伏見宮九条家旧蔵諸縁起」一一二頁

(21) 岩波文庫「親鸞和讃集」二二九頁

(22) テキストは、東京大学史料編纂所蔵謄写本。私に句読点をほとんどし、朱点等は省略した。

(23) 渡辺信和「覚什『聖徳太子伝記』の東夷西戎——ふたたび太子十歳の条をめぐる——」(『説話』九号、一九九一年三月)

(24) 本稿では詳細に触れないが、この派兵の過程で、松浦佐用姫と望夫石の伝承が用いられ、侵攻の失敗がドラマチックに演出されている。

(25) 諸書で表記が異なるため便宜的にこれで統一しておく。

(26) 他の太子伝諸本新羅侵攻譚については、以下の通り。「聖法輪蔵」は輪王寺本とほぼ同一で、「文保本」の別系統の異本である醍醐寺本も、戦国場面に大幅な増補がある以外は、輪王寺本と同一の筋書きを持っている。一方、物語的太子伝のもう一つの系統とされる増補系諸本(前掲注(2)参照)については、内閣文庫蔵「太子伝宝物集」をはじめ、叡山文庫蔵「太子伝」(享徳三(一四五四)年写)、内閣文庫蔵「聖徳太子伝拾遺抄」(享徳四(一四五五)年、神宮文庫蔵「太子伝」(明応九(一五〇〇)年写、四天王寺蔵「太子伝」等では、相互の記事に多少の違いはあるものの、おおむね「伝暦」の筋書きを踏襲し、太子三十一歳条に来目皇子が登場して、筑紫で新羅に呪咀されたとしている。ただし、これに別伝が付され、来目皇子が大陸に侵攻して新羅を攻め落とす様が詳細に描かれ、三十二歳条では、帰国した皇子が筑紫で呪咀によって命を落としたとされている。また、輪王寺本と同じく、奥書から四天王寺(行田坊に所蔵されていたことが知られる万徳寺蔵「聖徳太子伝」(享徳四(一四五五)年写)は、太子二十歳条は輪王寺本とは同様なが、二十九歳条以降は、増補系のもものに近い。覚什「聖徳太子伝記」(鎌倉末—室町初)は、太子二十歳条が輪王寺本に近く、二十九歳以降に関しては、「伝暦」を敷衍したにとどまり、来目皇子の

渡海も描かれない。なお、増補系諸本については、日本文学協会第21回研究発表大会（二〇〇一年七月、於神戸大学）で報告を行った。

- (27) 新羅や百済が日本の脅威になるというのは、太子十歳条にも「勅西新羅百済戎共、貢來事及度々」という記述があり、醍醐寺本太子二十歳条でも、崇峻天皇が新羅出兵の理由を「新羅大王欲心熾盛、亦大国ナル故ニ以威勢ヲ打取任那国、（中略）大国豈ニ凌小国哉、若如、是吾国亦小国也、何ゾ免此難、又新羅ノ大王、勅欲煩吾朝之衆、甚以奇恠也、仍今合力、於任那欲伐新羅大国」（醍醐寺本の引用は「聖德太子全集（三）」による。以下同）と語っている。同様の表現は「太子伝宝物集」や万徳寺藏「聖德太子伝」などにも見られ、新羅の脅威が、出兵の動機とされている。

- (28) こうした筋書きは、元寇に際して、日本側からも高麗侵攻が企てられていた時代の余韻を想起してもいいだろう（相田二郎『蒙古襲来の研究』（吉川弘文館、一九五八年二月）第四章「異国征伐の壮挙」）。

- (29) 中世太子伝では、三韓の混用例がしばしば見られ、半島の歴史に對する正確な知識に乏しかったことが知られる。同前掲注(23)参照
- (30) これに類する表現は醍醐寺本にも見られ「伝へ聞ク、大国ノ宮闕ハ、鍍金銀交珠玉、瑠璃ノ瓦ハ浸秋月ノ光、珊瑚ノ甍ハ曜春日ノ影」と、金銀で飾られた「大国」の宮殿が称えられている。一方、既に成沢光氏の指摘があるように、古代には、金銀の財宝に埋もれた新羅、というイメージが存在した（『蕃国と小国——古代日本人の対外観について』（『政治のことば——歴史の意味をめぐって——』平凡社、一九八四年四月）。例えば、「日本書紀」では、神功皇后が出征前に「朕西欲求財国」としていき、神代の記事にも、一書に曰くとして、「韓郷之嶋、是有金銀」と素戔鳴尊の言葉を引く。また、『肥前国風土記』には新羅侵攻を前にした神功

皇后の「朕欲征伐新羅、求彼財宝」（日本古典文学大系『風土記』三九四頁）という台詞を載せ、新羅の財宝の存在を示唆している。

- (31) 中世の朝鮮観について、高橋公明氏が、「朝鮮は大きな富をもたらず偉大な国である」という「朝鮮大国観」の存在を提唱し（『外交儀礼よりみた室町時代の日朝関係』（『史学雑誌』九一—八号、一九八二年八月）、これに対し村井章介氏が、朝鮮を一段低い国と見る「伝統的朝鮮観」は、尚も強固なものではなかったかと疑問を呈して、幾度かの論争が行われた（詳細な経緯は、村井「中世人の朝鮮観をめぐる論争」（『歴史学研究』五七六号、一九八八年一月）参照。また金光哲氏も「中近世における朝鮮観の創出」（校倉書房、一九九九年六月）で、中世の新羅観を詳細に論じている。むしろ、輪王寺本の「大国」を顔面通りに受け取るわけにはいかないが、表現として注意したい。

- (32) 福山敏男「初期の四天王寺」（『仏教芸術』五六号、一九六五年一月）として注意したい。

- (33) 『西大寺藏本』「異国襲來祈禱注録」（『大日本仏教全書（一一八）』三〇頁）

- (34) 川岸宏教「教尊と四天王寺」（『四天王寺学園短期大学紀要』七号、一九六五年七月）

- (35) 「上宮太子拾遺記」（同前掲注15）、三一九頁）

- (36) 中世の四天王寺信仰と外敵調伏については、高橋昌明「酒吞童子の誕生——もうひとつの日本文化」（中央公論社、一九九二年六月）一七一—五頁参照。

- (37) 阿部泰郎同前掲注(2)、渡辺信和「文保本聖德太子伝記」（『国文学解釈と鑑賞』五四—一〇号、一九八九年一〇月）。また、文保本太子四十一歳条の伎楽説話も、「四天王寺の聖靈会の草創を説く縁起叙述」であることが指摘されている（阿部泰郎「中世太子伝の伎楽伝来説話——中世芸能の縁起叙述をめぐって——」（『芸能史研

〔七七八号、一九八二年七月〕。

〔38〕 太子十歳条については、田淵福子「松陰中納言物語」と聖徳太子「〔密教文化〕一九二号、一九九五年一月」参照。太子十六歳

条については、牧野和夫「中世の説話と学問」(和泉書院、一九九一年一月)「中世文学と『太子伝』及び『永濟』をめぐる諸問題——注釈者——」に詳しい。

## 新刊紹介

荒木尚著

### 『中世文学叢考』

本書は第一部・第二部・第三部からなる三部構成をとり、それぞれが和歌を中心とした異なる作品を対象とする。概観すると第一部では「新勅撰和歌集」「玉葉集」等の和歌、また定家・兼好・今川了俊らの歌論および文学活動に対する荒木氏の考察を収め、第二部では同じ幽齋本系統である「徒然草」の写本、桜井神社本と、細川幽齋筆と見られる永青文庫本の二本、またそれに関連する熊本県立美術館蔵の新資料とを比較検証し(後者二本の翻刻と影印も付している)、第三部では今川了俊の「光源氏巻々注少々」と、九州に存在した中古の女流歌人・檜垣姫の家集「檜垣姫集」とに、それ

ぞれ新しい見解から論考が試みられている。

本書で言及される歌集・歌論は多岐に渡っており、氏の熱意溢れ、かつ示唆に満ちた好著である。本書により、中世和歌文学研究が新たな指標を得ることを期待する。

(二〇〇一・三 和泉書院 A5判 三〇三頁 一〇〇〇〇円) (神戸 和)

奥田勲・岸田依子・廣木一人・

宮脇真彦編

### 『新撰菟玖波集全釈』第三卷

平成十一年より刊行が続けられている『新撰菟玖波集全釈』の、第三巻目である。同書は、『新撰菟玖波集』全二十巻の初の本格的全訳注書であり、本巻には巻第六(冬連歌)・七(賀連歌・哀傷連歌)・八(恋連歌上)の三巻分が収められている。底本は前巻同様、筑波大学蔵全二十巻四冊本であ

り、底本の句の脱落を天理大学附属天理図書館綿屋文庫蔵、実隆本によって補う。凡例によれば本巻では巻第六の中の十三句が底本に欠け、同実隆本で補われているという。前巻に引き続き、『新撰菟玖波集』の各巻頭毎に構成と配列についての解説・〈歌材〉目次を付し、語釈・付合・現代語訳を注釈の主たる項目とする。

本書は、一語一語がどのような先行文芸——特に和歌——を表現的背景として成り立っているかを語釈において示し、句と句とがどのような表現的連鎖によって成り立っているかを付合において探る。本書の刊行は、連歌という文芸を織りなす経糸と緯糸とを、ひいては室町文化そのものを、着実に明らかにしていくものであるといえよう。

(二〇〇一・三 三弥井書店 A5判 三〇七頁 八五〇〇円) (田口 寛)